

「相手の言いたいことを理解出来なかった」経験者が6割を超える ～平成24年度「国語に関する世論調査」～

文化庁が公表した平成24年度「国語に関する世論調査」によると、「相手の言いたいことを理解できなかった」、「自分の言いたいことが相手に伝わらなかった」経験がある人は、どちらも6割を超えました。また、「流れに棹さす」などの慣用表現の使い方について、誤用が多いとみられる五つの慣用句の意味を尋ねたところ、四つの慣用句で本来の意味ではない方が多く選択されるという結果となりました。

本稿では「国語に関する世論調査」の一部を掲載します。

1. 「国語に関する世論調査」について

文化庁では、「日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する」ことを目的として、平成7年度から毎年実施しています。調査対象は全国16歳以上の男女です。

2. 人とのコミュニケーションについて

「誰かの話を聞いていて、その人の言いたかったことと、自分の受け取ったことが食い違っていた」という経験があるか、ないか（表1）

よくある	時々ある	ある(計)	余りない	ない	ない(計)	分からない
9.2	57.2	66.5	26.8	6.5	33.3	0.2

「よくある」と「時々ある」を選択した人を合わせた「ある(計)」は66.5%、「余りない」と「ない」を合わせた「ない(計)」は33.3%となっています。

年齢別にみると、「ある(計)」の割合は、20代以下で8割前後、30～50代では7割前後、60歳以下では約6割となっています。

次に「ある(計)」を選択した人に、相手の言いたいことを理解できなかった理由を尋ねた結果、「自分の聞き方に問題がある」と感じる人が29.3%、「相手の話し方に問題がある」と感じる人が

17.7%、「どちらとも言えない」は52.8%となっていました。

年齢別にみると、「自分の聞き方に問題がある」と感じる人は、20代(39.7%)が最も多く、16～19歳(38.3%)、30代(35.3%)と若い年代で多くなっていました。

「誰かに話をして、自分の言いたかったことが、相手にうまく伝わらなかった」という経験があるか、ないか（表2）

よくある	時々ある	ある(計)	余りない	ない	ない(計)	分からない
11.7	51.8	63.4	28.9	7.4	36.3	0.2

「よくある」と「時々ある」を選択した人を合わせた「ある(計)」は63.4%、「余りない」と「ない」を合わせた「ない(計)」は36.3%となっています。

年齢別にみると、「ある(計)」の割合は、16～19歳から50代までは6割台半ばから7割前後で、60歳以上では5割台半ばとなっています。

次に「ある(計)」を選択した人に、自分の言いたいことが伝わらなかった理由を尋ねた結果、「自分の話し方に問題がある」と感じる人が55.0%、「相手の聞き方に問題がある」と感じる人が8.6%、「どちらとも言えない」は35.9%となっていました。

年齢別にみると、「自分の話し方に問題がある」

と感じる人は、16～19歳が80.4%で最も多く、年代が高くなるにつれて徐々にその割合は少なくなっています。

3. 言葉の意味

五つの言葉を挙げて、どの意味で使っているかを尋ねた結果、「潮時」以外の四つの言葉「役不足」、「流れに棹さす」、「気が置けない」、「嘖飯もの」で本来の意味ではない方が多く選択されるという結果になっています。

*辞書等で本来の意味とされるものを□で囲んでいます。

(1) 「役不足」

例文：彼には役不足の仕事だ

(ア)本人の力量に対して役目が重すぎること 51.0%

(イ)本人の力量に対して役目が軽すぎること 41.6%

年齢別では、16～19歳を除くすべての年代で、本来の意味ではない(ア)を選択した人の方が多くなっています。中でも、50代は(ア)57.9%、(イ)38.1%と、本来の意味ではない方を選択した人が約20ポイント多くなっていました。

(2) 「流れに棹さす」

例文：その発言は流れに棹をさすものだ

(ア)傾向に逆らって、ある事柄の勢いを失わせるような行為をする 59.4%

(イ)傾向に乗って、ある事柄の勢いを増すような行為をする 23.4%

年齢別では、すべての年代で、本来の意味ではない(ア)の割合が、(イ)を大きく上回っていました。本来の意味である(イ)を最も多く選択したのは、40代の28.1%でした。また、「分からない」と回答した人は、20代以上の年代すべてで1割を超えており、最も多かったのが60歳以上の16.4%でした。

(3) 「気が置けない」

例文：その人は気が置けない人ですね

(ア)相手に対して気配りや遠慮をしなくてよい 42.7%

(イ)相手に対して気配りや遠慮をしなくてはならない 47.6%

年齢別にみると、すべての年代で本来の意味ではない(イ)の割合が多くなっていました。(イ)を選択した人が多かったのは16～19歳(54.1%)と30代(53.3%)で、(ア)を選択した人との差はどちらの年代も約18ポイントありました。一方、40代以上の年代では(ア)と(イ)を選択した人の割合は、ほとんど差がありませんでした。

(4) 「潮時」

例文：そろそろ潮時だ

(ア)ちょうどいい時期 60.0%

(イ)ものごとの終わり 36.1%

年齢別にみると、すべての年代で、本来の意味である(ア)を選択した人の割合が多くなっています。なかでも、16～19歳と60歳以上の年代で(ア)を選択した人が6割を超えていました。その他の年代では約5割となっていました。

(5) 「嘖飯もの」

例文：彼の発言は嘖飯ものだ

(ア)腹立たしくて仕方がないこと 49.0%

(イ)おかしくてたまらないこと 19.7%

本来の意味である(イ)を選択した人の割合は、五つの言葉の中で最も少なくなっていました。

年齢別にみると、(イ)を選択した人の割合は20代の29.7%を最高に、以降年齢が高くなるほどその割合は減少し、60歳以上が16.5%と最も少なくなっていました。

慣用句は、日常の会話にはあまり使用されず、正しい使い方を身につける機会が減っているのではないかと推察します。また、本来の意味ではない使い方をしてしまうと、お互いの意思疎通に支障をきたすことにならないかと懸念されます。

※詳しくは文化庁ホームページを参照してください。

(奥 桂子)